小特集

書評『京都大学百二十五年史　通史編』

浅沼薫奈 †

はじめに

本書は京都大学125年のあゆみを記した通史であると同時に、大学沿革史の空白を埋める、貴重な記述を確認することができる歴史書である。たとえば、「第一編　京都帝国大学」「第四章　戦時期」中、「第二節　戦時体制下の諸動向（二）」には、次のような文章がある。「一九四三年一一月までで在学のまま陸海軍に入隊した者は三二六名」（167頁）、（在学生の徴集延期停止に関して）「この件は大学に事前の打診はなかった」（168頁）、「入隊した学生の学籍については軍隊に服役期間中は休学とした上で、一九四四年九月卒業見込の者は一九四三年一一月に仮卒業証書を授与し翌年九月に正式に卒業」（同）等々。

これらはいずれも『京都大学百年史　総説編』（京都大学後援会、平成10年６月）には詳細な記述のなかった事実であり、学生史においても重要な史実である。こうした具体的な年月を含む事柄を改めて示し、事実として言い切ることは難しい。単純なようでいて、膨大な資料を確認しなければこの数行すら書くことはできない。大学史上における戦時下の様相をめぐる研究は近年大いに進展しているが、本書のこれらの部分だけをもってしても、歴史の大枠のなかでさらなる資料的検証を重ね細やかに詳述されていること、戦時体制下における大学自治への視座を持ちながら、学徒出陣がどのように展開されたかについて現代的に改めて捉え直していることなどがわかり、これらの点だけでも本書刊行の意義がすでに大きくあるといってよい。もちろん、そのほかにも広範な研究領域に対し、多方面にわたって参照すべき多くの史実が含まれている。後述するような特筆すべき優れた点を含め、本書刊行によって、日本の大学沿革史および近現代史研究に大きな貢献を果たされたといえよう。

とはいえ、本書は「大著」ではあるが「著大」ではない。目次や参考文献、索引など含めて500頁程度にまとめられており、個別大学125年分の沿革を描いた通史としては比較的コンパクトにまとめられた部類に属する。一般的な学術書ほどの厚みであったことは、本書を見てやや意外ではあった。多くの歴史ある大学は、自校の歴史をある程度の冊数や頁数でもって誇示するのが、いまだ一つの慣例であるからである。しかし、このようにまとめたことに、実は意味と工夫があったことはすぐに感じられた。最初に気付いた点をあげれば、各章末に付された注記の丁寧な記載と、比較的平易な文体が心がけられている点である。

大学沿革史は従来、出典を含む注記の記載は絶対的に必要という意識は薄く、校内に未整理のまま保管された資料や同窓生の記憶にゆだねられ書き上げられるという例も多かった。そのさい、ページ数を含む表現の制限はほぼなく、その大学の歴

† 大東文化大学東洋研究所特任准教授

史と特質とを手に取るように理解できるよう思いのままに描くのが大学沿革史の常であり、わりと近年までそういう例は多くあった。もちろん、そうした特色を持つ個別大学の沿革史は、それはそれとして大きな価値があり、有用な情報が多く含まれている。自己検証的な筆致、近代日本における大学創設への真摯な姿勢や情熱、創設関係者をはじめとする個別大学固有の故事逸話にもあふれ、時として「手前味噌」「自画自賛」と言われようとも、現在ではそれ自体が二度と手に入れることができない貴重な情報を含む歴史的資料となるため、それらを活字として残した各大学の判断は正しかったと思う。一方、大学沿革史編纂の現場は1980年代前後より新たな展開を見せるようになった。歴史研究や教育史研究などに関する専門的な学識を持つ者が編纂に携わり、沿革史関連業務に専従で取り組めるよう組織的に配置するといった環境が整うようになって、資料的根拠に基づく記述の正確さ、出典明記の重要性が改めて意識されるようになった。ただし、大学沿革史において確実な出典の記載が行われるようになって以降も、それは基本的に一次資料の記載を指すことが多く、多くの研究成果をその研究者への敬意を含め多面的に網羅しながら活用する、という意識は薄かったように思われる。これは、大学沿革史の本文が基本的に根拠となる資料を併記しつつ記述が進むという特徴があったことが一因でもあるが、しばしば根拠となる典拠記載の不足や曖昧さも指摘されてきた。

改めて、本書はその点を徹底的に改善し、この間に多く蓄積されてきた研究成果をもとに詳細や典拠資料は注記とし、一般的な学術書と同仕様とした点は、まずもっとも評価されるべき点であろう。あわせて、本書がごく端的に史実をとらえつつ進んでいき、かつ、文体が比較的平易であることは、本書「編集後記」にも「基本方針」として「学術的実証性を保ちつつ、読みやすい文体で叙述する」（450ページ）と明示されていることからも、積極的に意図したものであることがわかる。さらに想像を膨らませれば、こうした工夫がなされたのは、多方面に想定される読者に対して、最後まで読み切ることができる内容にしたいという思いも込められているのではないだろうか。

以上のような優れた良書であることを前提としつつ、本書を読み、特に印象的だったことを次の点に限って言及してみたい。

1．大学の通史をどのようにとらえたか

沿革史編纂にあたっては、時期区分や枠組みがまず念頭に置かれる。そして、基本的に明治期以降を描くことになる大学史は、往々にしてそれを戦前と戦後とに分け、自校が歴史的分断をどのように認識してきたのか、その解釈を加えることとなる。特に帝国大学から新制大学へとあゆみを進め、この間の高等教育機関の中核を担ってきたともいえる大学を描くとなれば、その認識と解釈とは世に大きく問われる。

こうした定義に照らして見てみたとき、本書の時系列の構成についてはごく標準的なものである思われた。まず、全体を大きく、「京都帝国大学」「京都大学」「国立大学法人京都大学」という名称変更に沿った三編に分けている。言うまでもないが、「第一編　京都帝国大学」が旧制期のあゆみを扱っており、「第二編　京都大学」が新制大学となって以降のあゆみを辿っている。ただ、この間、1933年の滝川事件以降をもって「戦時期」としているのは京都大学らしい構成であり、事件の発端から京大側の対応、「滝川がなぜ処分されたのか」（134ページ）「滝川以外にも学説を問題視された教授にいたにもかかわらずなぜ滝川だけが対象となったのか」（同）といった新たな視点を加えつつ論が展開されていく様子は短文ながらも鮮やかである。なお、参考までに『京都大学百年史　総説編』の同時期を描いた箇所を確認してみると、「第

５章　京都帝国大学の苦悩」中の「第１節　滝川事件（京大事件）」として取り上げており、流れとしては戦時体制へ入っていくことを意識した構成ではあるが、戦時下の動向を具体的に描いているのは同章中「第５節　戦時体制の強化」であり、その間に３節分をはさんでいることもあって、それぞれが独立している印象である。また、百年史で使用された「京大事件」という文言は、沢柳事件を含めて本書では使用されていない。関連して、東京帝国大学教授戸水寛人の政治的発言から、京都帝国大学法科大学教授陣たちも巻き込み大学教員の身分保障や大学自治問題へと発展した「戸水事件」については、本書でも「第一章　創立期」中、「第三節　各種制度設計」において触れられている（31ページ）。一方、「第二章　模索期」において「沢柳事件」に関する記述は一節分、およそ10ページにわたってあることから、両事件における大学自治の慣行、確立の過程について、もう少し踏み込んだ言及があってもよかったのではないかとも感じた。ただ、あくまで京都大学史であるので、編集方針や紙幅の関係から考えればそこまでの専門的な言及は難しかったのだろう。

さて、「第一編　京都帝国大学」を描いているのが、本書において197ページであった。一方、新制大学として京都大学以降を描いているのは、中扉裏などの白紙ページを含み246ページとなっているから、やや戦後へ割いたページ数が多い。ただし、正確には「第二編　京都大学」が197ページ、「第三編　国立大学法人京都大学」が46ページなので、第一編と第二編のページ数をまったく同じに揃えている緻密さに驚いた。また、旧制期が約50年、新制期が現在まで約75年だが国立大学法人への移行前までが約50年と考えると、その著述の割合は妥当である。

大学沿革史では、物事を数値化する術もよく使われる。あらゆる事象に関連した学生数や教職員数の動向、学科数や講座数の変遷などはもちろん、校舎講堂などの建築物や施設設備に関連したことまで、図表類は単なる数字の羅列ではなく、その大学の生命そのものを表現している。生命力のある数字は説得力をともなうものである。本書は全編を通じて、それらの数字を極めてふんだんに活用している。4302ページ（pdf版）という大部の資料編を別に用意しているにも関わらず、そちらを参照と注記して説明を省くようなことはせず、本書通史編においても大変な労力をかけた丁寧な図表類をあちこちに確認することができる。本書における図表類の的確な使用は、当該大学の転換点を図式あるいは数の表記により示し、ひいてはそのようになった理由をも説明する役割を明確に果たしており、読者の理解を大いに助けるものである。

以上のような構成上の特徴を前提とし、改めて本書は歴史的分断をどのようにとらえたのだろうか。便宜上、本書は名称で各編を区切っているので一見すると戦前と戦後とに分断しているように見えるものの、京都大学において理念的変容は見られなかった。大学通史として、この点は大きな特徴である。外側から行われた高等教育改革に沿った変革、それにともなう体制の整備や苦労は語られているが、京大における理念そのものは継承された。このことは帝国大学の解体を描く上で非常に重要であるので慎重な確認が必要であるが、あくまで大学理念に関しては「国家原理に関わる文言は姿を消し」（209ページ）たという法令上の文言に見られる変化であり、創立以来の京都大学においてその教育理念や在り方に変化はなかったと本書は描いている。さらには、京都帝国大学から「帝国」を消除する過程において鳥養総長は「積極的ではなかった」（212ページ）と本書中で付記していることも重要なので重ねて指摘しておこう。

なお、些細な点であるが、章構成という側面からやや気になったのは、「概観」が第一編第一章と第三編第一章には付されなかったことである。

ページ数の兼ね合い以上に編集上の理由があったのだろうけれども、前者では前史として三高史にもう少し踏み込んで言及することができたであろうし、後者では21世紀における大学像や学生像の変化を描くことが可能となったようにも思う。

２．新たな歴史像の構築

大学の歴史は、校地の歴史でもある。本書において「キャンパスの整備」は、第三編を除いて各編各章において必ず触れられており、そこでは校地および校舎建物などの設備が、どこに、どのように整備されていったかが記されている。辿って見ていくと、大阪から移転してきた第三高等中学校の置かれる土地が最初にどのように選定されたか、続いてその数年後に新設されることとなった京都帝国大学が、その間に建築された校舎建物ごとその地を譲り受け使用することとなっていった経緯が描かれる。つまり、京都という地域性を求めて開設が行われたというよりは、三高が大阪から京都へ移転していたからこの地に第二の帝国大学が新設されたということになる。その後のキャンパス整備の歴史は、畑地となっていた尾張徳川家の藩屋敷跡が大学の教育研究施設として活性化し、生まれ変わっていく様子が描かれており、この地が近代化とともに歩んだ歴史を見ることができる。ただし、大学と地域社会との関係性については、本書においてどのように認識されているかというと、ややわかりにくい。京都という土地や風土に対し、そこに立地し地域へ果たすべき役割はどのように進められたか。それは、広く大学運営方針にどう反映されたか。「関西大学の一階梯」（６ページ）「多年京都人士が熱望せる大学の設置」（同）であったとされる創設の背景は、その固有の存在として歴史上どのように確保されていったのだろうか。

また、本書を読んで控えめながらもオリジナリティを強く感じるのは、各時代の「学生生活」への言及が必ずなされている点である。時に「運動会」「学生運動」などが独立して詳細に描かれていることを除けば、それぞれやや断片的であるものの、学費や寮問題などを含めて学生活動全般へのあたたかなまなざしが注がれており、具体的で生き生きと描かれていることにも注目しておきたい。前述の「キャンパスの整備」と同様に、各章中のこの「学生生活」のみを選んで読み進めれば京大生の歴史がわかると言えるほど、よく描かれている。それ自体が歴史の記録であり、大学の値打ちそのものであることを改めて自覚させるものである。特にこの「学生生活」を読んで気付くことは、女子学生に関する記述である。本書において女子教育の開始および女子の「学生生活」については、まず1919年に特定の科目のみを履修する医学部選科生について「医学部に最初の女子生徒として二名が入学した」（105ページ）こと、次いで戦後高等教育改革のなかで共学となり改めてはじめて正規の女子学生の入学を受け入れることとなった経緯が描かれている。後者では女子一期生の入学前の学歴（206ページ）や同時に問題化した女子寮などの施設設備についてその改善がなされていった（241ページ）様子などを読むことができるが、以降は「女子学生」に関するトピックは取り上げられていない。この記述方針は意識的に徹底されているものらしく、たとえば、学生運動に関連して1960年の国会突入によって「東京大学の学生一名が死亡するに至った」（273ページ）ことに言及した箇所においても、死亡したのが女子学生であるとは指摘していない。多くの場合、事件発生時からこれまで、この死者が「女子学生であった」ことはことさら指摘されてきたように思うが、本書ではそれ以外の出来事においても女子か男子かは明記していないことから、現代的なジェンダーフィルターの意識をもって敢えてそのような方針をとられたのだろう。

本書は大学史としての通念に照らしてみると、

その編集方針を含め既存沿革史の枠を超えたものであり、読者に新たな視点を与えてくれる内容を多く含んでいる。数ある大学沿革史のなかでも優れた特徴を有する本書であるが、それゆえに残された課題もあると考える。紙幅の都合や本書の編集方針は理解した上で敢えて指摘すれば、本書で取り上げられた事例、人物について偏りをなくそうとするあまりに、言及が足りなかった部分はなかったか。たとえば、本書において「大学像」はどう描かれたか、そしてそれは新たな視点をともなうものであったか。言い換えれば、京都大学における学問観はどのように構築され、それはどの時機に見られたのかということにもなる。本書は総長などの事績や思想などについてはあまり触れられていない。創設段階において、木下広次総長の入学式告示における「当大学は東京帝国大学の支校にあらず」（11ページ）「固有の生存を為すには独得の姿性」（同）といった発言があるが、以降の時代ではほとんど確認できなくなる。歴代の大学責任者たちの１つずつの発言は、それ自体が歴史の記録であることを勘案すれば、本書において記述が少ないのは惜しい気もする。また、近年に目を向けてみれば、1980年代から1990年代におきた学内問題に関しては単なる「社会問題」（362ページ）としてではなく、その後の影響も加味すれば、大学執行部の意向も含めもう少し踏み込んだ言及があってもよかったのではないかという印象をもつ。あわせて、2000年代以降の学内的事実を構造的に提示するには時間がまだ短すぎるが、今後これらの時期における学内政策に対する知見と評価が提供される日が待たれる。

おわりに

大学沿革史の分野はこれまで、多くの大学が切磋琢磨し可能性を模索しつつ、その成果を蓄積してきた。時期にもよるが、そのなかでややリードをとってきたのは私学であったと個人的に考えている。周知のように、私学が「大学」となったのは官立よりも遅れたので、旧帝大の大学群がリードしてきたと思われるむきもあるだろうが、そうとは言い切れない。幕末から維新期にかけての私塾、英学塾、宣教師たちが興したミッション・スクールなどを起源とする私学は日本各地に数多くある。したがって、私立法律学校も含めてそれら私学は東大を除く旧帝大よりも一足先に創立100年を迎えており、そのこともあって、大学史研究の新たな側面に大いに挑み、一定の研究成果をあげてきた。日本の大学は総数として私学が圧倒的に多いため、出版されてきた数も種類もこれまで自然と多くなったという理由もある。基礎資料となる一次資料を悉皆的に収集し、まずは資料集から刊行し、それに即した通史を刊行するという方法もそのなかで確立されてきた。いずれにしても、1980年代を前後して100周年を迎えた大学群を中心とし、大学沿革史の刊行は第一次ブームを迎え、多くの大学で多種多様な工夫がなされた沿革史が刊行されるようになった。こうした数多の「大学沿革史の歴史」を経て、本書『京都大学百二十五年史』という成果が生まれたわけである。特に本書は計画的に編纂を進められ資料編と同時に刊行されたという点においても、これまでにない画期的な沿革史である。

個別大学の沿革史は、熱心な読者を得ることが比較的難しい書物の一つである。その一方でまた、読者には幅広い層が想定されるという意味でも難しい書物である。とくに学外者に対して興味を抱かせることは難しく、その傾向は顕著となる。にもかかわらず、学内にはそれぞれの研究分野の第一人者が揃っているうえに、個別事例におそろしく詳しい事情通もいたり、さらには同窓生にとっては実体験によって周知の事実であったりもする。その場合、どの立場の人に対しても公平で正確な記述となる沿革史とは何かと、執筆担当は頭を悩ませることになる。専門史学とのかかわりをもちつつ、一般読者への問いかけもあきらめない、そ

うした姿勢が如実に感じられたのが本書であった。

大学沿革史は基本的に自校を称賛するだけでなく、自己反省あるいは自己批判の上にこそあるべきである。執筆者は冷静な目で大学のあゆみを確認する作業を重ね、執筆にあたっては時に批判的見解を伴う苦しい判断もしなければならない。そうした特徴を有した本書は、京都大学の歴史に興味のある人だけでなく、近代日本史研究や教育史研究を志す人びとにも一読を勧めたい。今後の大学沿革史の分野において、一つの指標なるべき書物が刊行されたといえよう。